

A-FIVE の検証に係る検討会（第4回）の議事要旨

日時：令和2年7月15日（水）15：00～17：00

場所：食料産業局第1会議室

出席委員：別紙のとおり

1 農林水産省からの説明

- ・(株)農林漁業成長産業化支援機構に係る検証報告案について説明。

2 委員等からの意見・質問等

【投資規模等について】

- ・投資規模や投資利回りの想定の誤りが今回の結果に至った原因のほとんどの部分を占めているのではないか。報告書には投資規模や投資利回りの想定と実績や、コストが高コストであることを分析した資料を表形式で分かりやすく掲載した方が良いのではないか。
- ・投資自体が問題ではなく、制度設計等の入口の部分が問題であったことが明確に分かるようにまとめるべきではないか。
- ・A-FIVE を通じて、6次産業化の啓蒙、教育を図ろうとしてたのではないか。6次産業化の政策的な重要性は分かるが、そのために、A-FIVE は、サブファンドを全国に展開する等の重いミッションを背負わされ、投資のパフォーマンスを発揮するのが難しくなったのではないか。
- ・A-FIVE の制度検討に当たって官民で協議するような場が無かったことが問題。対象領域における現場のリアルなニーズや課題、その実態を踏まえた適切な資金供給手法や経営支援策について、有識者を含めて議論し検証する場が検討段階にあって、それを踏まえ、規模感やゴールセッティングされれば、結果は違っていたのではないか。
- ・事前の検証をしっかりやっていたら、高すぎるIRRの設定等を前提とした組織等にはならなかったはず。

【サブファンドについて】

- ・経営支援については、サブファンドについては、原則、GPがアウトソーシングしているものであり、GPが行うべき。重層的に行うのは非効率。なぜこのような仕組みとなったのか。
- ・サブファンドごとにやる気や能力に差があったことを踏まえれば、もっとメリハリを利かせた対応を行うべきだったのではないか。一律にA-FIVE が介入するのは非効率である。

【直接出資について】

- ・投資と農林水産業の知見だけでなく、品質管理や販路に係る支援ができる人材が求められていたのではないか。
- ・投資と農林水産業の双方の知識を有する人間がいないと投資業務はできないのか疑問。そのような人材は殆どいないはずであり、ハードルを上げすぎではないか。
- ・人材確保は難しいとしつつ、官民ファンドは人材を育成する役割があるという議論は相反するのではないか。
- ・農業者の立場からすると、ハイブリッドな人材は必要であると考えます。投資と農林漁業との分野をシームレスにできないので、経営支援が上手くできないのではないかと。経営支援を行う人が6次産業化することが必要。
- ・VCの投資に当たっても、全ての能力を満たす個人が必ず必要ということではなく、経験の豊富な独立系VCなどでは、投資、技術、チームビルディング、事業開発、知財、PR/ブランディングのプロフェッショナルがそれぞれ参画しチームとして補完しあい、必要とされる体制を成立させている。そういった体制で投資育成業務を継続していくことで、結果として新しい領域で必要となるハイブリッド人材の育成にも繋がる。

【出資の手続きについて】

- ・出資手続きが重層的であったことが出資の障害となっていた点は重要。報告書には他ファンドとの比較表を掲載してよく分かるようにすべき。

【経営支援について】

- ・経営支援を難しくした要因として、ファンドの出資割合（50%以下）という制度的な制約がある。通常は会社の経営権を取った上で人を送ることで経営支援が上手く回る。こういった難しい面がそもそもあることを報告書には記載すべき。

【A-FIVEの組織について】

- ・120億円という最終損失の見込について、世間一般の見方は個別案件の出資の失敗に起因するというもの。そうではなく、コストの構造が問題であるということをより明確に説明できるようにしておくことが必要。最初に予算上で大人数を確保し、それをそのまま消化して大人数を雇用するというのは、予算的で硬直的な発想で行われたのではないかと。こういったことをもう少しクリアにした方が良い。

【その他】

- ・ A-FIVE がこれで終わりで、農業分野に出資が進まなくなることを懸念している。農業分野はデッド（融資）でカバーできると見る向きもあるが、赤字覚悟でも将来を見据えて規模拡大していくような場合、金額が大きくなり、公庫だけでは対応ができなくなることも起こり得るのではないか。先を見据えた未来の提案もして欲しい。
- ・実際に投資の現場にいると現在も A-FIVE の出資を活用したい等の話題が出る。フードテックやアグリテック領域ではミドル期以降のステージにおける大きな資金需要が継続的に存在し、政府系ファンドに対する期待感は今もある。
- ・エクイティーの活用、官民ファンド全体がダメだということにならないような整理が必要。
- ・今後、新たな出資の推進方策を検討するに当たっては官民で協議するような場を設け議論を行うことが不可欠。
- ・失敗で終わりではなく、この失敗をどう未来につなげていくかを検討して欲しい。

(別紙)

A-FIVE の検証に係る検討会委員名簿

(五十音順、敬称略)

かわもと あきら
川本 明

アスパラントグループ (株)
シニアパートナー
(慶應義塾大学経済学部特任教授)

こまさ みずき
小正 瑞季

リアルテックホールディングス(株)
グロースマネージャー

たかた はじめ
高田 創

岡三証券 (株) グローバル・リサーチ・センター
理事長 エグゼクティブエコノミスト

ながもり かつし
長森 克史

明治ホールディングス (株) 経営企画部長

まるた ひろし
丸田 洋

(株) 穂海 代表取締役

※必要に応じ、委員の追加があり得ます。